

はじめに

Sir William Dugdale (1605-86) による *The History of St. Paul's Cathedral in London* (『ロンドン聖ポール寺院の歴史』、1658年出版) は、いかなる過去の上に現在があるのかということを追求めた好古学書であり、この書物は、英国国教会を代表する存在であったロンドン聖ポール寺院の歴史と墓碑の調査を緻密に行った著者と、建築やモニュメントの挿絵を作成した版画家 Wenceslaus Hollar (1607-77) との協働によって完成した。紋章官であった Dugdale がこの作品を執筆したのは、好古学者 (アンティークエリー) としての、あるいはロイヤリストとしての極めて強い使命感のためであった。執筆当時、清教徒らによって冒瀆され破壊される危機に瀕していた聖ポール寺院を崩壊あるいは喪失から保護するため、著者は長い歴史をひもとく、繁栄した時代の聖ポール寺院の姿を書物の中に留めようと試みた。Hollar の挿画によって視覚的記録を取り入れ、同時代のロイヤリストから支援を受け、後世に伝えることに成功したのである。

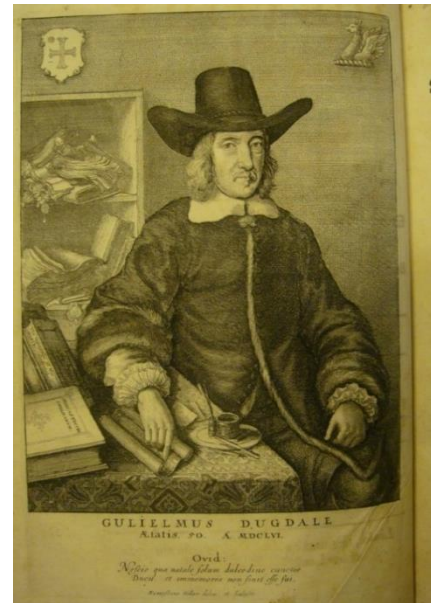
Dugdale の好古学研究

17世紀英国好古学者は主に古い文献資料や遺跡、碑文などを精査することによって、過去を著述という形で再現しようと試みた。その背景には、一時代前のエリザベス朝イングランドにおいて、国の繁栄、ナショナリズムの高揚などにより、母国の過去を解明しようという意識の芽生えがあった。また、アングロサクソン語の理解が進んだことなど、好古学研究が発展するにふさわしい状況が整備されてきたのもその頃である。そのような時代に、William Camden (1551-1623) の *Britannia* (『ブリタニア』1586、初の英語訳版 1610) が世に出され、英国における好古学研究が進展を遂げ始めた。この書物には、古文書や碑文研究のほかに、系譜学、紋章学、固有名詞学、貨幣学、歴史言語学など、あらゆる歴史補助学の要素が含まれていた。それらすべてがナショナル・アイデンティティあるいはローカル・アイデンティティの探求につながるものである。

好古学者の務めは膨大な量の古文書・史料を解読し精読して、過去の社会構造、地理、言語、教会、土地の風習などを著述によって再現することであった。それを裏付けるように、Dugdale の肖像画では背後の書棚にはいかにも古い文献資料が雑然と置かれ、一方彼の脇にある書物は、研究の成果とも言える自身の著作である *Monasticon Anglicanum* (『英国の修道院』1655) と *The Antiquities of Warwickshire* (『ウォリックシャの故事』1656) である。人物の下には「祖国の地というものは、何かはかり知れない魅力によって人を惹きつけ、忘れさせることはない」というオヴィディウスの言葉がラテン語で引用されている。

The History of St. Paul's が出版された共和政時代において、英国国教会は機能していないばかりか、聖堂は傷み、冒瀆的な行為によって崩壊の危機に晒されていた。Dugdale は、寺院内部のモニュメントと墓碑銘を記録し、過去の著名な人物の功績や重要な家系血統や親族関係を保存することを通して、国教会のシンボリック的存在であった聖ポール寺院の権威と伝統を後世に伝える書物を制作した。この作品の背景には、過去を記録するという好古学者の熱意に加えて、共和政時代の英国において衰退し蔑まれている英国国教会への嘆き悲しみ、さらには教会を冒瀆する者への不満そして怒りという感情を共有するロイヤリストの支持があったのである。¹

The History of St. Paul's において著者は主に古文書の研究と碑文の記録によって過去の解明をしているが、この書物の特殊な点は、版画家 Hollar との協働により、芸術性においても 17世紀英国書物の中で頂点を極める作品となったことにもある。Hollar の版画によって好古学書がテキスト本文以外の価値を携えるようになり、書物は図鑑的な性格を帯び、一種芸術品のようなインパクトさえも持つようになった。² Dugdale が尊敬していた Camden にはロンドンウェストミンスター寺院内の碑文を丁寧に記録した著作 (*Reges, Reginae, Nobiles et alii in Ecclesia Collegiata B. Petri Westmonasterii Sepulti*, 1600) があるが、それは文字のみで構成されていて、モニュメントや教会建築のイメージをふんだんに取り入れて記録した Dugdale の作品とは対照的である。



Sir William Dugdale の肖像
(Wenceslaus Hollar 作)

The History of St. Paul's の出版

The History of St. Paul's は17世紀半ばの英国で用いられるようになった予約購読出版制度によって出版され、40名ほどがサブスクライバーとして出版を資金面で支持した。一枚の銅版画制作費用にあたる5ポンドを負担すると、挿画に紋章、氏名、モットーなどが刻まれ、さらに出来上がった書物を受け取ることとなる。多くの場合、本の見開き左側に版画、右側に碑文の記録を見ることができる。

聖ポール寺院で主任司祭を務めた詩人 John Donne (1572-1631) の墓碑を扱った部分を例に挙げると、ページ中央に死者が骨壺から立ち上がるような姿をしたモニュメントが描かれ、上部には、左側に紋章、右にカルトゥーシュがある。カルトゥーシュから、版画制作資金を負担したサブスクライバーは Margaret Clapham という名の女性であることが読み取れる。そこには、「私 (Clapham) はこのような偉大な教会があまりにも荒廃し冒瀆されていることを嘆き、著名で雄弁であった John Donne 博士のこのモニュメントの記憶を保存して後世に奉獻することに心を砕いた」という意味の文句がラテン語で刻み込まれている。また、Clapham は夫妻でこの書物のサブスクライバーとなったが、夫の Christopher Clapham は中世の王族 John of Gaunt のモニュメントの版画制作費用を負担し、インスクリプションと紋章によって、自身が John of Gaunt に遠くつながる子孫であることを示唆している。

ひとりが複数枚の版画制作費用を負担したケースでは、ロンドンの商人 Sir John Robinson が寺院のプロスペクト (外観) を東西南北の各方向からとらえた版画4枚が最も多い例である。その4枚のうち3枚は見開き2ページ分の大型の版画であり、1666年のロンドンの大火で焼失する前の寺院の全体像を知る上でまさしく貴重な資料となっている。Robinson は、チャールズ I 世朝で英国国教会の頂点の座にいた Archbishop of Canterbury, William Laud の甥であった。Laud は1630年代に聖堂の修復に非常に熱心であった人物であり、実際に4枚の版画のうち2枚にはインスクリプションに彼の名が残され、Laudの功績と、栄華を誇った英国国教会の過ぎし日の記憶が刻み込まれている。寺院西側のプロスペクトにおいては、建築家 Inigo Jones による1630年代の修復の際に設置された、正面入り口のポーチコ (柱廊) がその全貌を現わし、さらにその上部にはスチュアート朝のふたりの国王の像がそびえ立っている。この版画に描かれたパラディオ様式のポーチコは、ヨーロッパでも有数の美しさを誇ると言われたときのものであり、Laudが尽力して実現した修復工事によって築かれたときの姿をしている。しかしながら、1650年代までに聖ポール寺院は見る影もないほどに変わり果てていた。聖堂は傷み、世俗的な用途に供され、ポーチコには露店が立ち並び、市民は信仰のためではなく日常の雑務のために教会に出入りしていたのである。

他にも類似する例がある。オックスフォードの学者 Thomas Barlow が出資した版画プレートは聖ポール寺院の南側プロスペクトであるが、当時の実際の姿とは異なり、立派な尖塔が描かれている。この尖塔は1561年に落雷で焼失していて、その代わりにゴシック建築には不釣り合いな屋根が載せられていた。複数制作された見開き2ページにわたる教会プロスペクト図の中で、Barlowのもの以外はすべて当時の実際の有様通り、尖塔を欠いている。つまり、1650年代の聖ポール寺院があまりに悲惨な状態であったため、そうではなく、版画の中では完全な形の中世の聖堂を復元してほしいと彼が自ら求めたのかもしれないが、現時点で関連するやり取りの有無など詳細は明らかでない。Barlow は紋章を持たなかったため、自身が希望するインスクリプションのみを著者に提出していた。彼が選んだのは古典からの引用で、現状を表す「教会は朽ち果てて修復が必要である」という言葉と、過去の姿を示唆する「このような退廃的な時代には築くことのできない神殿」という意味の二つの言葉であり、それらがプレートに刻まれることになった。このメッセージから、版画に込められた Barlow の意図は十分に伝わったと言えよう。

むすび

The History of St. Paul's において Dugdale が意図したのは古文書から得た知識に基づく聖堂の歴史の著述であったのだが、実はむしろモニュメントの記録を重視したと考えることができる。好古学研究は単独で行う作業に加え、仲間と協働してさらに成果が上がる行為である。冒瀆的な時代の風潮への危機感を共有したロイヤリストたちが、この書物のサブスクライバーとなって出版を支援し、それと同時に自身の感情を吐露し、記録する機会を得ることとなった。



John Donne のモニュメント
(Hollar 作)

¹ Graham Parry & Michiyo Takano (2020) "The Illustrations to Dugdale's *History of St Paul's Cathedral*: Subscribers and their Sentiments", *The Seventeenth Century*, 35:4, 473-495, DOI: 10.1080/0268117X.2019.1621486

² Elias Ashmole, *The History of the Most Noble Order of the Garter* (1672), Francis Sandford, *A Genealogical History of the Kings of England* (1677), Robert Thoroton *Antiquities of Nottinghamshire* (1677) など。